

同時通訳における概念骨格

—心的表示の持続性と流動性について—

石塚 浩之

(広島修道大学)

This article focuses on the nature of non-linguistic mental representations constructed by simultaneous interpreters drawing on the conceptual complex (CC) model originally introduced by Funayama (e.g. 2005, 2007). While processing source text, two types of mental representations are considered relevant: linguistic and conceptual representations. Conceptual representations remain longer in the interpreter's mind than linguistic ones, facilitating the processing of source text and the production of target text. Although conceptual representations develop incrementally, they keep their identity during discourse processing. Consequently, some of their features remain unaltered, while others change. The conceptual skeleton is identified as the solid part of non-linguistic representations. Analysing linguistic differences found between source and target text as recorded during simultaneous interpreting, this study elucidates the nature of the skeleton, describes the consistency and liquidity of conceptual representations as a whole, and explores how they develop based on the skeleton and their role in the interpreting performance.

1. はじめに¹

同時通訳の作業を認知的処理という側面から見ると、通訳者の理解内容はディスコース処理の初期におぼろげな形を取り始め、作業の進行に伴い徐々に充実すると捉えられる。一方、一貫したディスコースを処理している限り、この理解を反映する心的表示にも整合性のとれた発話理解を支えるなんらかの持続的特徴がなければならない。このような心的表示の構造と役割を明らかにし、通訳者の構築する心的表示の持続性と流動性について考察することが本稿の課題である。

これまで同時通訳の起点テキスト (source text: ST) と目標テキスト (target text: TT) の間に見られる差異を手がかりとし、通訳者の構築する心的表示についての考察が進められてきた (e.g. Funayama, 2007; Ishizuka, 2012)。本稿は、これらの研究で提示され

ISHIZUKA Hiroyuki, "Conceptual Skeletons in Simultaneous Interpreting: Consistency and Liquidity of Mental Representations," *Interpreting and Translation Studies*, No.16, 2016. Pages 85-105. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

てきた概念的複合体 (conceptual complexes: CC) の考え方を受け継ぎ、同時通訳者による意味構築の一側面を記述する。

本稿の構成は以下の通りである。次節では、本稿での議論の理論的背景と基本的想定についてまとめる。第3節では、実際の通訳例を観察し、心的表示のあり方を分析し、言語表示とは異なるレベルでのいくつかの特徴、具体的にはディスコース処理の進展に伴う CC の一貫性および活性状態の変化を検討する。第4節では、別の例を使用し、概念骨格 (conceptual skeleton) に基づいた CC の漸進的展開を描出する。第5節では、本稿の分析に関する考察を示す。最後に第6節で結論を述べる。

2. 通訳プロセスにおける心的表示

本節では CC に関する基本的想定について述べ、さらに通訳プロセス研究における CC モデルの位置づけについて概観する。

ディスコースの内容は聞き手の頭の中にどのように保持されるのか。言語表現の一部が記憶に残る場合もあるが、理解内容は単なる言語情報の集積ではない。5分程度のスピーチでも、使用された言語表現をすべて記憶することはほぼ不可能であるが、理解内容を整理し頭の中に思い浮かべることができる。Johnson-Laird (1980) や Kintsch (1998) は、ディスコース処理において構築される心的表示には、言語記号を基盤とする命題表示と非命題的表示の2種類があると主張する。ここでは言語表示と概念表示を区別し、両者の特徴を表1にまとめる²。

表1：言語表示と概念表示の区別

| | 言語表示 | 概念表示 |
|----|--------------|------------------|
| 形態 | 固定した意味と形式の結合 | 固定した形式を持たず内容は流動的 |
| 配列 | 線状に並んだ記号列 | 非線形的な情報の集合 |
| 処理 | 逐次的部分的処理 | 漸進的全体的処理 |
| 保持 | 処理が済むと消える傾向 | 一貫して保持される傾向 |

近代言語学の扱う言語とは意味と形式の結合であり、これは線状に並んだ記号列をなす。この記号列の持つ言語情報とは語彙情報と統語情報の集積である。記号列は漸次入力され、基本的に入力順に処理される。記号列は一定期間を超えて記憶に残る部分もあるが、大半は短時間しか保持されない。一方、概念表示は形式を持たない流動的な心的表示である。この表示は言語処理の結果として漸進的に構築される非線形的表示である。この漸進的構築という特徴から、概念表示はディスコース処理の進展の中で持続的に保持されることになる。つまり、漸進的構築と持続的保持は概念表示の持つひとつの特徴の表裏をなす。

船山はこうした概念表示を CC (e.g. 船山, 2005; 2006; Funayama, 2007) と呼び、理論

化を試みている。CCはオンラインのディスコース処理において構築される心的表示の記述装置であり、その基本的想定は以下の通りまとめられる。

- (1) a. 資源：言語情報と非言語情報の双方に由来
- b. 状態：非命題的・非言語的な概念表示
- c. 展開：ディスコース処理の進展に沿った漸進的構築

まずCCの資源は言語情報と非言語情報の双方が関わる。ここでいう非言語情報は、文脈情報と言い換えることもできる。これはさらに外部情報と内部情報の2種類に分類できる。外部情報としては、原発話者の表情や身ぶり、現場の状況など、通訳現場で得られるST以外の情報が挙げられる。一方、内部情報としては、通訳者の認知環境にあらかじめ含まれていた情報、すなわち、いわゆる背景知識などのほか、先行ディスコースの理解によって構築された概念も含まれる。発話理解に必要な情報がこのような文脈情報から得られる仕組みは関連性理論 (Sperber & Wilson, 1986/1995) における表意や推意の取得プロセスとして説明可能である。

なお、背景知識に含まれる情報としては、フレーム (Fillmore, 1982/2006)、スキーマ (Langacker, 1987)、ICM (Lakoff, 1987)、認知モデル (Evans, 2009) などの認知資源も含まれる。これらの資源は言語知識の基底であると同時に発話理解に寄与する情報の一部となるが、発話理解に際し作動記憶の内部に構築される心的表示ではなく、長期記憶内に蓄えられた知識である。作動記憶内に構築される非命題的心的表示という点に関していえば、CCはむしろメンタルモデル (Johnson-Laird, 1983) との共通する性質を持つ。しかし、メンタルモデル理論においては、心的表示の漸進的構築は扱わない。

このようにCCモデルは、認知語用論、認知意味論、認知心理学など、広範な周辺分野との接点を持つ。しかし、(1)に挙げた3つの性質を包括的に論じるための理論的枠組みは他に見当たらない。これが発話理解研究においてCCという新たな記述装置を提案する動機となっている。

Funayama (2007) は同時通訳プロセスの記述にこのCCモデルを援用することを提案した。Ishizuka (2012) は同時通訳における心的表示の展開に焦点を絞り、CCモデルを援用して通訳者の概念処理を描出した。本稿はこれらの研究を土台とし、同時通訳者の心内処理をさらに精緻に記述することを目的とする。本稿のテーマは、特に(1c)のCCの漸進的構築を具体化するものである。このCCの漸進的構築という基本想定は、ディスコース処理の進展に沿って構築される心的表示が同一性を保ちつつ変化するということを意味する。心的表示が同一性を保つためには、そこになんらかの不変要素が備わっているということであり、同時にこれが変化するためには流動的要素も認められねばならない。本稿では、実際の同時通訳記録の観察に基づき同時通訳者の心的処理を記述し、CCの漸進的構築を「概念骨格に基づく概念要素の展開」と「CC構成要素の活性状態の変化」として記述し、ここから得られる知見を示す。

3. 不変構造の保持

ここでは、CCの一部に事象情報が組み込まれ、概念骨格として機能した例(A)を検討する。分析資料は、NHKの討論番組における同時通訳の記録であり、番組での議題は「アメリカよ、どこに行く」である。分析箇所は番組司会者の「アメリカから生まれた多くの独創的なアイデアなんですが、今後も生まれていくと、そのように考えていらっしゃいますか」という質問に対する答えの冒頭部分であり、話者はMITのMichael Schrage氏である。

(A)

- E 199 [S] O my goodness - of course! Of course! But I'm going to go further and say that the real source of
 J 199 [S] もちろんです。もちろんです。 でも、さらに
- E 200 innovation's not ideas per se. It's the ability to test those ideas. It's the ability to conduct experiments,
 J 200 申し上げますと、イノベーションの源泉は、アイデアそのものではなく、それらのアイデアを試す力、
- E 201 to build prototypes, to build models, to build simulations, to create communities of innovation. To have
 J 201 実験を行う力、 試作品を作る、 モデル、シミュレーションする力、そしてイノベーション
- E 202 early adopters and customers to play with these prototypes and develop them into products, into services, into
 J 202 ンのコミュニティーをつくる力、最初に使ってくれる利用者と顧客を探して、
- E 203 businesses, into industries. So the idea, i.e., it's almost the least important aspect of the future. What makes the United
 J 203 そこから本格的な製品と サービスと業界部門に成長させるということです。アイデアというの
- E 204 States a terrific innovator is that we are a wonderful receiver and player
 J 204 は、ほとんど重要性が最も低い要素であります。イノベーターたるものにアメリカをなしているのは、我々
- E 205 with what people invent and create and explore. There's a cultural attitude,
 J 205 は受容力があるということと利用する力があるということ、人が発明し、創造し、模索すること、使う文
- E 206 there is a market oriented attitude, there is an entrepreneurial oriented attitude that attracts smart people with good
 J 206 化があるということ、そして市場志向の姿勢がある、企業家精神に満ちた姿勢があるということ、そこで

3.1 訳出の特徴と注目点

この例では、There's a cultural attitude (E205)が「使う文化があるということ」(J205)と訳出されている点に注目する。問題はSTに対応情報のない「使う」(J205)である。通訳者は「使う文化」(J205)という訳出を行うにあたり、このディスコースをどのように処理していたのだろうか。この訳出箇所には「誰が」「何を」使うのかは明示されていないが、「使う」という訳出を行うために、通訳者はこの参与者となる動作主と対象を把握していたと考えられる。以下では、通訳者の発話処理をディスコースの流れに沿って分析するに先立ち、この訳出に見られるSTとTTの特徴を整理する。

なお本稿において、シングル引用符は、発話理解において表示される概念の表記に使用する。すなわち、'ability'は、abilityあるいは能力という語で表すことのできる内容を持った概念要素の便宜的な表記である。これはabilityのコード化された意味とは

異なるし、この概念が英単語として表示されていることを示すものでもない。また角括弧は概念要素のタイプ表記に使用する。例えば [agent]、[theme] は、概念要素のタイプが事象参加者の agent、theme として把握されていることを示す。

3.1.1 ‘ability’ の繰り返し

まず TT には「力」という表現が繰り返し現れている。「アイデアを試す力」(J200)、「実験を行う力」(J201)、「モデル、シミュレーションする力」(J201)、「イノベーションのコミュニティーをつくる力」(J201)、「利用する力」(J205) と、5 ヶ所で「力」という表現が使用されている。さらに「受容力」(J205) にも同じ概念を表象する表現があり、これを含めると、6 ヶ所で「力」を明示する訳出がなされている。これらは ST の ability に対応する訳出であると判断できるが、ST で ability が使用されるのは the ability to test those ideas (E200) と the ability to conduct experiments (E200) の 2 ヶ所のみである。この ST と TT の非対応はなぜ生まれたのであろうか。

この ‘ability’ の繰り返しは、テキストの結束性 (Halliday & Hasan, 1976) と関連性理論 (Sperber & Wilson, 1995) における表意の形成という考え方によって、ある程度の説明が可能である。E200 では ability という語が 2 回繰り返しられ、語彙的な結束性をもたらす。これらはそれぞれ to test those ideas (E200)、to conduct experiments (E200) という不定詞句を導き、さらに to build prototypes (E201)、to build models (E201)、to build simulations (E201)、to create communities of innovation (E201)、to have early adopters and customers (E201) と、to 不定詞の並列構造が続いている。この並列構造は文法的結束性をもたらす。これにより、これらの to 不定詞が形容詞的用法であるとの判断を導き、省略された被修飾語句 ability を飽和 (Carston, 2002) により取得することで表意形成がなされ、これが TT に反映しているのである。しかし、この説明が通用するのは、「アイデアを試す力」(J200)、「実験を行う力」(J201)、「モデル、シミュレーションする力」(J201)、「イノベーションのコミュニティーをつくる力」(J201) の 4 ヶ所のみであり、「受容力」(J205) と「利用する力」(J205) には当てはまらない。

3.1.2 ‘use’ の繰り返し

(A) には ‘ability’ の他にも繰り返し訳出されている要素がある。J205 に「利用する力」と「使う文化」という表現があり、これらは共に ‘use’ を表象する。

「我々は受容力があるということと利用する力があるということ」(J204) は、we are a wonderful receiver and player (E204) に対応する訳出であると判断できる。ここには、上述の「力」の訳出の繰り返しの他、人を表す receiver (E204) と player (E204) が「受容力がある」(J205)、「利用する力がある」(J205) と訳出されており、訳出語彙の非対応だけでなく、構文の非対応も認められるが、ここでは「利用する」(J205) という表現が ST の対応箇所に見当たらないという点に注目する。また「使う文化があるということ」(J205) は There’s a cultural attitude (E205) に対応する。ここでも「使う」(J205)

に対応する表現は ST には認められないが、‘use’ に関わる表現が訳出されている。

TT で ‘use’ を表す表現が最初に現れるのは「使ってくれる利用者」(J202) であり、ここでは「使って」と「利用」に ‘use’ に関わる表現が重複して使用されている。この訳出は to have early adopters (E202) に対応し、‘use’ の情報源はここにあると思われる。しかし、「利用する力」(J205) や「使う文化」(J205) で、繰り返しこの要素が訳出される動機は ST の結束性と飽和のみでは説明できない。アドホック概念 (Carston, 2002) という別のタイプの推論を持ち出す手もあるが、やや場当たりの説明である感は否めない。次節では、ディスコース処理において構築される持続的な心的表示である概念骨格という考え方を導入し、この例をより統一的に説明する。

3.2 概念骨格：概念表示の不変構造

問題の ‘ability’ の訳出の繰り返しは、通訳者がこの情報を持続的に保持しつつ後続部分の処理を行っていることを示す。この情報保持は、心的表示の保持と言い換えることができる。通訳者は ‘ability’ を単に語彙情報として保持しているのではない。例えば、「それらのアイデアを試す力」(J200) は、‘test’ という事象が ‘ability’ の具体的な内容であるという理解を示している。事象の theme である ‘idea’ は ST 由来の情報である。この agent が ‘America’ であることは ST にも TT にも明示されていないが、後述の通り、通訳者はディスコース処理の背後でこれを把握していると考えられる。この ‘America’ は ST から入力された情報ではなく、この個所の訳出以前に通訳者の認知環境に含まれていた情報である。これにより、通訳者は ST の結束構造による支えを失っても、この情報を a wonderful receiver and player (E204) の訳出でも活用できるのである。この例で、通訳者は ‘ability’ について、以下のような CC を持続的に保持していたと考えられる。

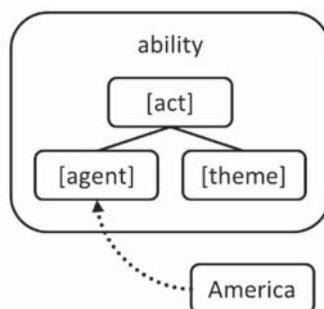


図 1: ‘ability’ の概念骨格

図中の風船型の図形はそれぞれが概念要素を指し、図形内に書き込まれた英単語は概念要素の内容を概略的に示すための標識である。太線の図形は、訳出に使用された要素であり、通訳者の認知環境において活性化された要素であることを示す。角括弧

の単語は概念要素のタイプを示す。

ここでは‘ability’についてのCCの要素として事象情報が組み込まれている。この事象のagentには‘America’が指定されていると考えられる。どの時点から「agent = ‘America’」という把握がなされていたかを特定することはできないが、確実に把握されていたと見なせる時点から、ある程度の遡及はできるだろう。

ability という語には「誰かが何かを行う」という意味を語彙的フレームとして結びつけている。これは通訳者の背景知識として長期記憶に含まれる。図1の概念はこうした長期記憶に含まれる種々の情報の活性化した項目 (Cowan, 2005) の結合からなり、作動記憶内部に構築された心的表示であると考えられる³。また agent に ‘America’ を置くことは原発話者の属性という非言語情報に由来する。この概念は ST 由来の言語情報、ST 外の非言語情報、通訳者の背景知識のすべてから構成されている。通訳者は「アメリカの能力」をディスコースの主題として捉え、「アメリカによるアイディアの利用」という情報と合わせ持続的に保持し、変項情報をタイプ指定のされたスロットに挿入することによってディスコースの後続部分処理したのである。このように、ディスコース処理のために構築された概念表示のうち、後続するディスコースの処理の基盤として持続的に保持される不変構造を概念骨格と呼ぶ。なお、概念骨格は、概念表示の内容を理論的に抽象化した構造体であり、独立した心的表示ではない。以下では、この例についてさらに詳細な分析を示す。

3.3 構成要素の活性状態の変化

表2は本節で扱う訳出例から概念骨格の表出を観察しうる部分9か所を抽出し一覧にまとめたものである。これらの訳出には、いずれも、概念骨格の要素として、topic である ‘ability’、その内容である event と参加者 (agent, theme) の把握が認められる。(A6) は “To have early adopters and customers” (E201) の一部である。この “To have” に注目すると、この動詞から構築された event が「探す」と訳出されており、agent は非明示の ‘America’、theme は ‘adopters and customers’ と解釈できるが、「使ってくれる」(J202) という訳出に注目することで、この処理の背後に ‘use’ を event とする枠概念の保持を確認することができる。概念骨格の要素は常にすべてが活性化しているとは限らない。しかし、少なくとも TT の表現に直接的に結びつく要素は活性化していると思なせる。反対に TT に表れない要素は低活性と思なす。(A6) の「使って」(J202) および「利用」(J202) の theme は ST にも TT にも明示されていないが、概念骨格の要素として継続的に把握されている。これは旧情報として低活性の状態にあると思われる⁴。

表2：(A) における訳出の対応

| | ST | TT |
|----|---|------------------------------|
| A1 | It's the ability to test those ideas | それらのアイデアを試す力 |
| A2 | It's the ability to conduct experiments | 実験を行う力 |
| A3 | to build prototypes | 試作品を作る |
| A4 | to build models, to build simulations | モデル、シミュレーションする力 |
| A5 | to create communities of innovation | イノベーションのコミュニティーをつくる力 |
| A6 | early adopters and customers | 最初に使ってくれる利用者と顧客 |
| A7 | develop them into products, into services, into businesses, into industries | 本格的な製品とサービスと業界部門に成長させる |
| A8 | we are a wonderful receiver and player | 我々は受容力があるということと利用する力があるということ |
| A9 | There's a cultural attitude | 使う文化があるということ |

表3は(A1)から(A9)より推定される認知要素の活性状態を示す。

表3：CC 構成要素の活性状態の変化

| | topic | event | agent | theme |
|----|-------|-------|-------|-------|
| A1 | *1 | *1 | 0 | *1 |
| A2 | *1 | *1 | 0 | *1 |
| A3 | 0 | *1 | 0 | *1 |
| A4 | 1 | *1 | 0 | *1 |
| A5 | 1 | *1 | 0 | *1 |
| A6 | 0 | *1 | *1 | 0 |
| A7 | 0 | *1 | 0 | *1 |
| A8 | 1 | 1 | *1 | 0 |
| A9 | 0 | 1 | 0 | 0 |

表中の数字1は要素が活性状態にあることを示し、0は要素が低活性であることを示す。数字1の左肩のアスタリスクはSTに直接的対応表現の見つかる要素を示す。この表では、agent、themeといった事象参加者の生起に関し、STとTTの間の差異は見られない。この点は(A1)から(A9)まで一貫しており、通訳者はSTの形式に忠実に訳出を行っていたと言える。しかし、(A4)、(A5)のtopicはSTに直接的な対応表現を持たない。この訳出は、上で述べた通り、テキストの特徴から言えば結束性により実現されたものであろうが、心的表示の観点からは図1に示した‘ability’の概念骨格

が保持されている状態と考えることができる。ここで CC を想定する意義は、(A8) より明らかである。(A8) では ST に対応要素が認められるのは agent のみであるが、主題情報と事象情報が TT に表出している。しかも、この agent は ST では“we”という指示代名詞として現れるのみであり、この言語形式は文脈を離れば何の具体的対象も持たない。ここでの“we”は原発話者を含む‘America’を指示するのであるが、これがこの非明示的な事象の agent として把握され topic を構造化する要素の一部として機能しているという事実は、(A8) の訳出以前から同一の agent が把握されていたことの証である。遡及的に、このことから (A1) から (A7) の訳出においても、この要素は、低活性ではあるとはいえ、把握されていたと判断できる⁵。

3.4 概念骨格と周辺要素

これまで主要構成要素 (topic, event, agent, theme) に注目し、概念骨格の役割を検討した。ここでは、これら以外の要素から概念骨格の働きについて考察する。

まず (A6) の「最初に使ってくれる利用者と顧客」(J202)に含まれる「くれ」に注目する。「くれ」は受益を表す形式であるが ST に対応表現がない。この訳出には‘use’を利益と判断する視点が内在している。また、前節で (A8) に通訳者の agent の把握があらわれていることを論じたが、この訳出から、少なくとも (A6) で「話者＝アメリカ」の視点が導入されていたことがわかる。

次に (A7) の「本格的な製品」(J203) という訳出に注目する。「製品」(J203) は products (E202) に対応するが、「本格的な」(J203) は追加表現であり、ST に対応情報はない。この「本格的な」(J203) は「試作品」(J201) との対比を示している。これにより、通訳者は products (E202) を解釈するために prototypes (E201) の概念を参照し、「本格的な製品／試作品」という図式を構築していたことがわかる。通訳者はこの概念骨格を保持し参照するのみでなく、これを使って処理した先行部分の情報も参照し、ST には非明示的な図式を独自に構築しているのである。

(A6)、(A7) のような訳出は、主要構成要素のみに注目すると、ほぼ言語的な対応によって訳出を行っているという判断しがちである。通訳者自身も忠実な語彙的対応によって訳出を行っているという実感を持っている可能性もある。しかし、このような周辺の要素にこそ、通訳者による認知処理の本質を垣間見ることができる場合がある。

さらに (A9) の ST には概念骨格の主要構成要素は一切含まれていない。にもかかわらず、TT には「使う」という表現がある。これまでの分析から、この訳出は概念骨格を代表する要素としてその内容である事象情報が活性化した結果と見なせる。つまり、(A8) までの訳出によって、まったく概念骨格の主要構成要素を含まない (A9) の ST が、概念骨格を基盤としこれと関連付けて処理されているのである。

3.5 構造の保持

ここでは ST に直接的な対応情報のない TT 表現を手掛かりとし、構造化された主題

情報が概念骨格として保持され、ディスコース処理に活用されている様子を分析した。この例で見た概念骨格は‘ability’という主題と、その内容として事象情報を含んでいた。この事象の agent は‘America’あるいはこれに関連付けられる主体であり、視点はこの要素に設定されていた。以上が概念骨格の不変要素であり、ディスコース処理は ST などからの情報を可変要素に挿入することによって実行されていたと説明できる。

表2の示す通り、主要要素が訳出されているかどうかという点からの判断では、この部分の訳出も ST から TT への置き換えという点で忠実な作業が行われているように見え、(A8)、(A9)のような訳出はむしろ例外に思われる。しかし、主要構成要素以外の周辺的要素に注目すると、こうした訳出は単なる訳出のゆらぎではなく、安定した通訳作業を支える適切な発話理解の本質の表れとしてとらえることができる。

以上、線形的な記号列の処理とは異なる水準で持続的に保持される非言語的(=概念的)心的表示の役割を明らかにし、その同一性を担保する共通の性質の一部である概念骨格の働きを検討した。次節では、心的表示の一貫性に加え、変化にも注目し、訳出の背後にある概念の持続性と流動性について考察する。

4. 概念の持続性と流動性

次に同じ通訳記録から2つの命題の対比が概念骨格として機能した例(B)を見る。

(B)

E 288 make it work. As to the jobs coming back from China, it isn't just the question of China. There's always

J 288 力、能力を持っている人たちの力をそぐことになりまますので、馬鹿げた政策になると思います。中国から

E 289 the next lowest cost country, and I think part of the reason that Mr Ginsberg's plastic business came

J 289 職が戻ってきていると。中国だけの話ではありません。これから競争しなければならぬのは、次に中国

E 290 back is this low cost shale, because shale natural gas is the component for

J 290 のように台頭してくるやはりコストの安い、賃金の安い国ということです。シェールガス、が、今、ふん

E 291 plastics, is the component for many, many chemicals, and that's why I believe that could be by itself, could be a

J 291 だんにみられる。そしてそれがプラスチックの原料として使われる。そしてさまざまな化学物質が、生ま

E 292 real game changer if government doesn't over-regulate it. I think the other problem that nobody has discussed is, one of

J 292 れていく。そしてこれが物事のやり方を変えていこうと思います。ただ、規制が

E 293 the major problems business has been facing is over-regulation, and that's

J 293 行き過ぎるということがないように政府が気をつけていくべきでしょう。ビジネスはこれまでは、あまり

E 294 one of the big things to close down people from being able to expand as rapidly as they would like.

J 294 にも過剰な規制に縛られるということが最大の課題であったからです。人々が自由にビジネスを

E 295 In China and most Asian countries, you want to build a new factory, you can do it very, very

J 295 拡大できるようにしていかなければなりません。中国をはじめとする、アジアの多くの国々

E 296 quickly, without a lot of red tape. Here in America, all kinds of bureaucratic processes are required to build a factory.

J 296 は 素早く工場を立ち上げることができる、これは、あまり煩瑣な 手続き、 えー、

E 297

J 297 認可の仕組みがないからです。アメリカではあまりにも規制が課されるのはこれはいけないと考えています。

ここでの原発話者は投資家の Wilbur Ross 氏であり、アメリカ経済の空洞化についての質問に対する答えとして、アメリカの実体経済の順調さについて述べている。この例では概念骨格を持続しつつ CC の内部が流動的に変化する様子が伺える。

4.1 訳出の特徴と注目点

まず (B) の訳出の特徴の注目点を挙げる。

Here in America, all kinds of bureaucratic processes are required to build a factory (E296)

アメリカではあまりにも規制が課されるのはこれはいけないと考えています (J297)

この部分では ST と TT の間にはかなりの差異が認められる。「あまりにも規制が課される」(J297) は “bureaucratic processes were required” (E296) に対応する訳出であるが、語彙的・統語的な形式的対応はほとんど見られない。“to build a factory” (E296) は訳出されていない一方、「これはいけないと考えています」(J297) は、ST に直接的対応要素を持たず、通訳者の把握した原発話者の推意 (Sperber & Wilson, 1995) の表出であると考えられる。この訳出の背後には、どのような認知処理があるのか。以下では引き続き、この訳出の背後に想定される概念骨格の働きに焦点を当て、CC の展開を記述する。

4.2 対比としての概念骨格

問題の訳出を可能とする認知処理を分析するため、ここでの概念骨格の起源を含むと思われる (B1) から分析を始める。手がかりとしては、いずれも ST に対応要素を持たない「ただ」(J292) と「気をつけていくべき」(J293) に注目する。

(B1) and that's why I believe that could be by itself, could be a real game changer if government doesn't over-regulate it (E291)

そしてこれが物事のやり方を変えていくだろうと思います。ただ、規制が行き過ぎるということがないように政府が気をつけていくべき (J292)

「ただ」(J292) は二つの命題の対比を表し、前出命題が真であるための条件を示す言語形式である。逆に言えば、対比の論理をとらえるために、2つの命題を同時に把握する必要がある。すなわち、ここで通訳者は‘game change’と‘regulation’の2つを同時にとらえ、両者の関係をとらえている。この関係はSTには表れておらず、通訳者が非明示的な論理を独自にとらえていることがわかる。また、「気をつけていくべき」(J292)には、政府の態度に関する通訳者の判断が表れている。このTTの前提としては、‘game change is good/over-regulation is a problem’ という価値判断がある。

この通訳者の判断の背後には、特に (2b) の価値観が不可欠である。(B) で「ただ」(J292) の訳出のタイミングを確認すると、“I think the other problem that nobody has discussed is” (E292) と重なっている。このSTは後続命題への負の評価を表している。この情報を取得しつつ訳出を進めたことが、‘over-regulation is a problem’ という価値判断の誘因となったと考えられる。

図2は(B1)の訳出の後半部分で「政府が気をつけていくべき」(J293)という訳出を行った時点で通訳者の構築していたCCを‘over-regulate’と‘game change’という2つの事象の関係を中心に図示したものである。

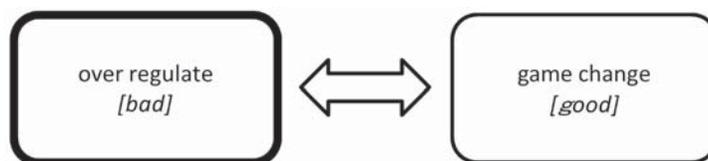


図2 : CC の状態 (B1)

太線による強調はそのCCが活性化していることを表す。また、イタリックで示した要素はその情報がSTに含まれないこと、すなわちその要素が非言語的資源に由来することを示す。図2では‘over-regulate’のCCが活性化しており、それぞれのCCの属性‘bad’と‘good’はSTに由来しないことが示されている。

ここでの‘game change’は民間の企業活動における変化を意味しており、政府の活動である‘over-regulate’との対比の把握には、政府と企業に関する背景知識の役割が認められる。この知識は「政府活動」と「企業活動」という2つの事象の対立構造を備えている。この構造化された知識は、語彙フレームなどの言語知識というよりは百科事典的知識というべき一般的知識であろう。これが図3で示す概念骨格の資源となったと考えられる。

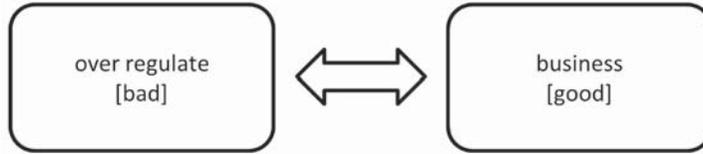


図3：‘over-regulation’に関する概念骨格

図2のCCはこれを基盤として構築されている。‘business’を表すCCは、このディスコースに含まれる様々な企業活動を理解するための資源となる。たとえば、ここでの‘game change’のagentは企業であるため、‘game change’は企業活動のひとつとしてとらえられている。このCCは企業活動という枠組みの範囲で柔軟に内容を変えることができる。また、2つの事象に含まれる価値属性とこれらの対立は、「政府は注意すべき」という通訳者の判断の根拠となる。

次に(B2)に含まれる「から」(J294)に注目する。これもSTに対応表現を持たない要素である。

(B2) I think the other problem that nobody has discussed is, one of the major problems business has been facing is over-regulation (E292)

ビジネスはこれまでは、あまりにも過剰な規制に縛られるということが最大の課題であったからです (J293)

ここでの「から」(J293)は、(B2)の訳出内容が「政府は気をつけていくべき」(J293)という判断の理由であることを示している。そもそも「政府が気を付けていくべき」(J293)は、通訳者の判断であり、STに対応要素はない。つまり、「から」(J293)によって示される情報は、通訳者の判断の根拠である。ここから(B2)の訳出がSTの言語情報のみに頼ったものではなく、(B1)をもたらしした図2のCCを基盤としたものであることがわかる。

さらに「いくだろう」(J292)と「これまでは」(J293)が、‘game change’と‘over-regulate’に対し、それぞれ使用されている点にも注意を促したい。これらはSTに文法的対応要素“could”(E291)および“has been”(E293)を持つ。その点、TTに独自の要素とは言えないが、特に「これまでは」(J293)は、単に動詞の付属語で時間を表しているのではなく、独立して時間を表す文節として訳出されている。これにより、‘the future is good/hope’および‘the past-present is bad’という非明示的判断が2つのCCに導入されていたと見せる。この時間的関係の把握は、2つの事象の因果関係とも矛盾せず、同じ概念骨格で処理することができる。図4はこの状態を示す。

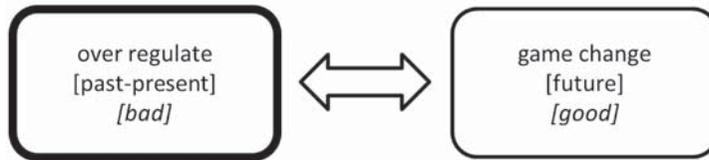


図4：CCの状態（B2）

ここでの発話理解は同一の概念骨格を基盤とし、そこに含まれるCCの内容を充実させる形で進んでいたと考えられる。「過剰規制は問題である。したがって、政府は気を付けるべきである」という論理関係はSTに明示されていない。しかし、通訳者はこの概念骨格を参照することでこの論理関係を把握している。

次に（B3）に含まれる「自由に」（J294）に注目する。

(B3) that's one of the big things to close down people from being able to expand as rapidly as they would like (E293)

人々が自由にビジネスを拡大できるようにしていかなければなりません (J294)

この例では「自由に」（J294）は“as they would like”（E294）に対する訳出であるように見える。しかし、（B）の訳出記録で訳出のタイミングを確認すると、そうではないことがわかる。通訳者は“as they would like”（E294）が発せられる前に「自由に」（J294）の訳出を行っている。つまり、この要素はSTに由来する情報ではなく、通訳者の推論により取得されたものである。引き続き、同じ概念骨格に即して分析を進めれば、通訳者は‘over-regulate’と‘expand’を対比させ、それぞれの概念の属性を‘binding’および‘freely’としてとらえている。さらに「していかなければなりません」（J295）は、企業活動のCCの‘future’、‘good’という属性からもたらされた判断といえる。図5はここでのCCの状態を示す。

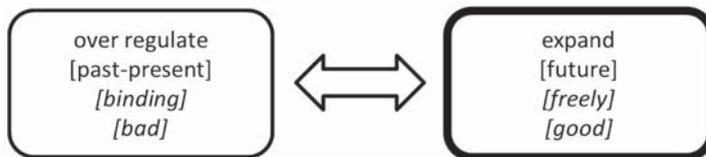


図5：CCの状態（B3）

企業活動を示すCCは概念骨格の要素として同一性を保ち、‘future’、‘good’という属性を引き継いでいるが、ここでの事象は‘expand’へと変化し、新たに‘freely’という属性を得ている。また（B1）、（B2）では、政府規制のCCが活性化しており、企業活動のCCは低活性であったが、（B3）では2つのCCの活性状態の関係が逆転してい

る。つまり、(B1) から (B3) へとディスコース処理が進む中で、CC は概念骨格を維持しつつ展開し、活性状態を変化させ、その内部は流動的に展開しているのである。

この訳出における概念骨格の役割は2つの点から指摘することができる。ひとつは、‘expand’ についての ‘freely’ というとらえ方の根拠としての役割であり、もうひとつは ‘expand’ に関する「そうすべき」という判断の根拠としての役割である。

(B4) では、“red tape” (E296) がいったん「煩瑣な手続き」(J296) と訳出されてから「認可の仕組み」(J297) と別の表現で訳出されている。ここには、直接的に概念骨格の構成要素は訳出されていないように見えるが、注意深く観察するとやはりこの背後には概念骨格の働きがあることがうかがえる。

(B4) In China and most Asian countries, you want to build a new factory, you can do it very, very quickly, without a lot of red tape (E295)

中国をはじめとする、アジアの多くの国々は素早く工場を立ち上げることができ、これは、あまり煩瑣な手続き、えー、認可の仕組みがないからです (J295)

「煩瑣な手続き」(J296) は “red tape” (E296) の語彙的知識から可能な表現であり、コード的置換による訳出といえる。通訳者はこの訳出に満足がいかなかったのか、一呼吸置いたあとで、これを「認可の仕組み」(J297) と訳出しなおしている。red tape は、形式的な役所の手続きやその煩雑さを一般的に表すメトニミー的な慣用表現である。ここで「認可」という訳語を選択することができた背景には、「新工場の設立」という状況における「政府規制」と「企業活動」との関係についての構造化された知識がある。また「認可の仕組みがないから」(J297) の「から」も (B2) と同様に ST に非明示的な論理関係の表出であり、概念骨格に含まれる ‘over-regulate’ と ‘expand’ の対立関係に由来すると考えられる。ここでの CC の状態を示したものが図 6 である。

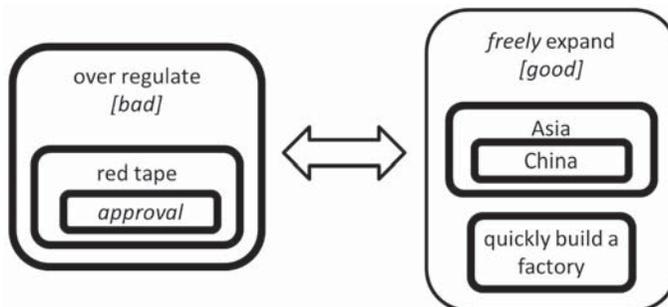


図 6 : CC の状態 (B4)

“China” (E295)、“Asia” (E295) という場所情報は企業活動の CC に送り込まれ、‘quickly build a factory’はこの CC の事象情報となり、CC の精緻化が進んでいる。政府

規制の CC も対立要素として活性化しており、ST 由来の ‘red tape’ は ‘quickly build a factory’ との関係から ‘approval’ に絞り込まれている (Carston, 2002)。ここでは概念骨格をもとに展開した CC が “red tape” (E296) の解釈の絞り込みに利用されているのである。

訳出が (B5) まで進むと、ST と TT との間にかかなりの語彙的・統語的な逸脱が認められる。

(B5) Here in America, all kinds of bureaucratic processes are required to build a factory (E296)
 アメリカではあまりにも規制が課されるのはこれはいけなく考えています (J297)

「あまりにも規制が課される」(J297)は“all kinds of bureaucratic processes were required” (E296) に対応するが、語彙的・統語的な形式的対応はほとんど見られない。むしろ、この「あまりにも規制が課される」(J297)の表す意味は「規制が行き過ぎる」(J292)、「過剰な規制」(J294)とほぼ共通しており、概念骨格の一部である ‘over-regulate’ による訳出であることは明らかである。一方、「これはいけなく」(J297)は ‘over regulate’ に関する判断である。これは通訳者の把握した原発話者の推意 (Sperber & Wilson, 1986/1995) の表出といえるが、この推論は当初より ‘over-regulate’ の CC の持っていた ‘bad’ という属性情報を根拠とするものである。

ここで “to build a factory” (E296) に対応する訳出がない理由は特定できないが、(B) の訳出記録で ST と TT の時間的対応を見ると、E297 ではすでに原発話が終了しているにもかかわらず J297 では訳出が続いている。訳出を切り上げる必要に迫られ、同時通訳の時間的制約から “to build a factory” (E296) を処理する余裕がなくなったということは考えられる。さらにこの時間的制約は、(B5) の逸脱を招いた一因となっていることも考え得る。ただし、逸脱にはあらゆる可能性があるにもかかわらず、(B5) に見られる特定の訳出がなされた背後には図 7 で示した概念骨格の役割が認められる。

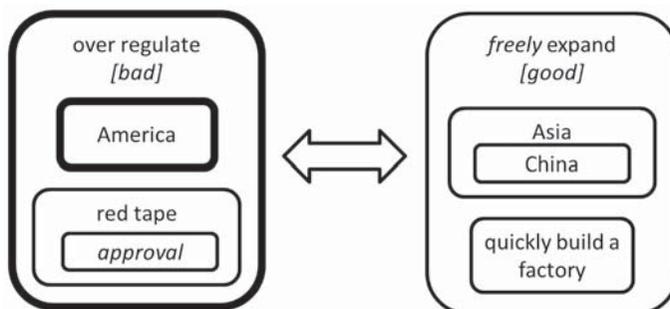


図 7 : CC の状態 (B5)

概念骨格の‘over-regulate’には‘America’という場所の情報が取り込まれ活性化しており、中国の企業活動を表すCCと対立している。すでに見たように‘over-regulate’の属性‘bad’はST由来の情報ではなく、(B1)の時点で通訳者の既存知識から概念骨格に取り込まれた情報であった。これが(B5)まで持続し、「これはいけない」(J297)という推意を得るための根拠となっている。

4.3 概念の流動性

非言語的な概念表示は固定した形式を持たず、ディスコース処理の展開に従い、その内容は流動的に変化する。一方、ディスコースとは一貫した情報のまとまりであり、こうした情報の理解に際して構築される以上、その概念表示にはその情報の一貫性を反映する同一性が認められるはずである。この例では‘over-regulate’と‘business’の2つの事象の対立関係が概念骨格として働き、それぞれのCCが活性状態を変化させつつ、その内実が流動的に変化する、漸進的に精緻化を遂げる様子を分析した。

上の分析で記述しきれなかった点について補足する。この例のSTはもともとアメリカの実体経済の順調さについての発言であり、(B1)での‘business’はアメリカでの企業活動を示していた。しかし、ディスコースの進展の中で(B4)で‘China’が‘business’に導入され、(B5)では‘America’がその対立項として‘over-regulate’に割り当てられる。ここにも概念表示の流動性がうかがえる。この2つのCCへの‘China’と‘America’の割り当てはSTに非明示的であることから、これは言語表示とは異なるレベルでの心的処理によるものであることがわかる。

この例からディスコース処理における概念骨格の本質的役割がうかがえる。概念表示の全体を見ると、その構造は保持されるが内部情報は流動的である。別な言い方をすれば、概念表示には固く持続的な部分と柔らかく流動的な部分がある。概念骨格は言語情報の集積ではなく、非言語的認知資源と融合した持続的心的表示である。通訳者は、概念骨格に肉を付け漸進的にSTを理解し、その理解に基づきTTを産出している。すなわち、概念骨格を活用したCCの構築はここでの通訳の認知プロセスの中核をなすものであったといえる。

5. 考察

5.1 CCによる記述の意義

本稿では通訳者によるCCの構築を概念骨格に基づく展開として跡づけた。こうした認知処理の大部分は通訳者の意識の届かない部分で実行されるため、TAPなど内省による調査で明るみに出ることはない。また同時通訳作業における脳の活性化状態はf-MRIなどの脳機能測定装置によりある程度の観察は可能であろうが、脳の部位の活性状態が直ちに心内における情報項目の活性状態を明らかにするわけではない。しかし、ST/TTの詳細な分析により、通訳者の認知環境における情報処理の実態をかなりの程度まで具体的に推定し、描出することができる。概念骨格の展開は、ディスコース処理

の動的記述の一例としても位置付けられる。また、CCの記述は2言語の通訳記録のみではなく、単一言語のディスコースに対しても可能であるが、同時通訳記録を対象とすることでCCのどの部分がSTの言語情報に由来し、どの部分が非言語情報に由来するかを詳細に論じることができる。

5.2 概念骨格の多様性

本稿の例からは2つのタイプの概念骨格、すなわちCCの要素として1つの事象情報が組み込まれた概念骨格と2つの事象の対比からなる概念骨格を見た。概念骨格には、他にも種々のタイプがあることが想定される。本稿で見た概念骨格は、通訳者の既存知識を基盤とし、語彙的なフレームや常識的知識が大きな役割を果たしていたが、ディスコースの内容によっては、2つのCCの包含関係あるいは因果関係など、よりアドホックな構造を持った概念骨格も見つかることが予想できる。また、概念骨格の構成要素や、要素の抽象化の度合いも、対象となるディスコースに応じて変化するものと思われる。例えば、事象や参加者が具体的に固定される場合もあるだろうし、タイプ設定のみの場合もあるだろう。視点、価値判断、その他の想定など、周辺の要素が構成要素となる場合もあり得る。

概念骨格のタイプ分析は、ディスコースで伝達し得るメッセージのタイプ分析と強い関連がある。理想的な聞き手があるディスコースを処理した場合、最終的にそのディスコースの内容は概念骨格を基盤にしたCCに要約されるならば、これがKitsch (1998)のいうマクロ命題の根底にある心的表示であると考えられることもできよう。また、言語が人間の思考を精密に表現する手段であるとするならば、この分析は同時に、人間の思考内容のタイプ分析とも表裏一体をなすと言える。CCについて考えることは、瞬間ごとの発話処理について考えることであると同時に、理解の結果として構築され、長期的に残る心的表示のあり方について考えることにもつながる。概念骨格の多様性は、今後の研究領域として大きな可能性がある。

5.3 通訳プロセスと心的表示

STとTTの間に認められる種々の差異をどうとらえるかは、通訳・翻訳研究者の理論的立場を決定する。技術的操作の実現を目指すとするならば、命題単位の処理や訳出単位の対応という考え方は魅力的である。STとTTの表面的な対応のみを見れば、かなりの部分がこうした作業で実行可能なようにも思える。こうした立場からは、STとTTの間の差異は原則を逸脱した例外とみなしたくなるであろう。しかし、言語表示とは異なる水準での認知処理を人間のディスコース処理の本質と見なすならば、STとTTの間に現れる種々の差異は、通訳者自身にもとらえきれない認知活動の実態を探るための重要な手がかりとなる。

本稿の分析は、ディスコース処理に関わる心的表示には言語表示とは異なるレベルでの概念表示があり、通訳作業を支えていることを示唆している。この2種類の表示

は関連しつつも独立している。この独立性がある言語で表現されたメッセージを別言語で再表現するための鍵であるならば、概念表示の非言語的性格こそが、通訳の認知的仕組みの要であるという主張も可能であろう。

また、ことばを理解する際に心の中にある情報は言語表示だけではないとすれば、語数など、言語表現の量を見るだけでは、認知処理における情報処理の量を測ることはできないことになる。だとすると、通訳作業における作動記憶の働きを分析するためには、言語表現の処理量のみを見るのではなく、概念表示の働きやその活性状態を考慮する必要がある。

6. むすび

以上、同時通訳の ST と TT の間に観察される言語的差異を手がかりとして、通訳者による心的表示の構築を跡づけた。本稿の分析では、非言語的な心的表示である概念骨格が線形的な言語表示とは異なるレベルで持続的に保持される一方で、ディスコース処理の進展に伴い流動的に変化する様子を描出した。発話理解に伴う心的表示には、言語表示と概念表示の2種類が関わる。通訳が2言語の高度な運用能力に基づきコミュニケーションを成立させる作業である以上、非言語的な概念のみによって通訳プロセスのすべてを語ることはできないであろう。しかし、概念表示の構築は安定したディスコース処理とそれに基づく通訳作業のために無視することのできないプロセスであり、通訳者による ST の理解および TT の産出においては、概念骨格が重要な役割を果たす。

この分析により得られた知見は、ディスコース処理の認知的側面の明示化に貢献すると同時に通訳の認知的仕組みに関しても重要な示唆をもたらす。言語表現は人間の認知活動の窓であり、同時通訳の TT は通訳者による ST 理解の反映である。そのため、このような分析により、他の手法では光を当てることのできない心的処理の実態を描き出すことができるのである。また、本稿で示した概念表示の展開は、ディスコース処理の動的記述の一例としても位置づけられる。

【著者紹介】

石塚浩之 (ISHIZUKA Hiroyuki) 広島修道大学准教授。主たる関心は、通訳の認知プロセスの明示化。論文に *Repetitive translation and conceptual processing in SI* (2012) 『通訳翻訳研究』第12号など。

【註】

1. この論考は、日本人工知能学会の第73回言語・音声理解と対話処理研究会(2015年3月9日)での口頭発表および14th International Pragmatics Conference(2015年7月

26日-30日)でのポスター発表を予備的考察とし、その後の研究をまとめたものである。

2. 命題表示と言語表示は同一ではない。しかし、本稿で注目するのは非線形的な概念表示のありかたであり、命題表示と言語表示の区別には立ち入らない。
3. 同時通訳の認知的側面と Cowan の作動記憶モデルの理論的親和性については水野(2015)を参照。
4. Chafe (1994) は単一言語のテキストを対象とし、情報構造の観点から新情報と旧情報に対応する要素の活性状態を論じている。本稿では、ここから着想を得て、2言語の同時通訳記録の TT に現れない要素まで考慮し、訳出に現れた要素を高活性、現れないが保持されている要素を低活性と見なしている。
5. 表3の補足的観察事項として、概念骨格を構成する要素のすべての要素が同時に活性化することはないという特徴がうかがえる。この現象の普遍性については本稿の議論の範囲ではないが、作動記憶に含まれる情報量をここでいう活性化情報の数で測れるとすれば、この現象は作動記憶容量により一度に活性化する要素の数が制約を受けていることと関連する可能性もある。
6. この価値判断の根底には ‘freedom is good/binding is bad’ という、より基本的価値観もあるはずである。
7. CC の表記は心的表示のすべてを描くことを目的としたものではない。この例の分析では事象情報の属性の変化に焦点を当てるため、参加者の表示は省略する。

【使用データ】

本研究で使用した通訳記録は NHK-BS1 「Global Debate WISDOM『アメリカよ どこへ行く』」(2012年11月17日放送)より採録した。

【引用文献】

- Carston, R. (2002). *Thoughts and utterances: The pragmatics of explicit communication*. Oxford: Blackwell.
- Chafe, W. (1994). *Discourse, consciousness, and time: The flow and displacement of conscious expression in speaking and writing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Evans, V. (2009). *How Words Mean*. Oxford: Oxford University Press.
- Cowan, N. (2005). *Working Memory Capacity*. New York and Hove: Psychology Press.
- Fillmore, C. J. (1982/2006). Frame semantics. In D. Geeraerts (Ed.), *Cognitive Linguistics: Basic Readings* (pp. 373-399). Berlin: Mouton de Gruyter. (Reprinted from *Linguistics in the Morning Calm*, pp. 111-137, by Linguistic Society of Korea (Ed.), 1982, Hanshin Publishing Company, Seoul)
- 船山仲他 (2005). 「発話理解のマイクロモデル」 船山仲他ほか(編)『同時通訳データに基づく言語過程のマイクロ分析:平成15-16年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))

- 研究成果報告書（課題番号 15520262）』、神戸市外国語大学外国語学部
船山仲他（2006）。「発話理解のオンライン概念表示」『外大論叢』57, pp. 1-22. 神戸市外国語大学
- Funayama, C. (2007). Enhancing mental process in simultaneous interpreting training. *The Interpreter and Translator Trainer, 1 (1)*, 97-116.
- Ishizuka, H. (2012). *Conceptual processing in English-Japanese simultaneous interpreting*. 博士学位論文. 神戸市外国語大学.
- Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. London: Longman.
- Johnson-Laird, P. N. (1983). *Mental models: Towards a cognitive science of language, inference, and consciousness*. MA: Harvard University Press.
- Kintsch, W. (1998). *Comprehension: A paradigm for cognition*. NY: Cambridge University Press.
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1987). *Foundation of cognitive grammar: Volume I theoretical prerequisites*. Stanford University Press.
- 水野的（2015）.『同時通訳の理論 認知的制約と訳出方略』朝日出版社.
- Sperber, D., & Wilson, D. (1995). *Relevance: Communication and cognition (2nd ed.)*. Oxford: Blackwell. (First edition published in 1986)

